

No.690 May 2014

ASAHI MACHI

㊦ 広報 あさひまち



里山の間から
「逆さ朝日岳」

2014
5

No.690



「桃色ウサヒプロジェクト」全国ダブル入賞

平成 26 年全国広報コンクール、第 6 回協働のまちづくり表彰

町PRキャラクター「桃色ウサヒ」の活動がこのほど、平成26年全国広報コンクール（主催：日本広報協会）の広報企画部門で入選するとともに、「第6回協働のまちづくり表彰（主催：日本経営者協会）」で優秀賞を獲得しました。

入選（入賞）の対象となったのは、「桃色ウサヒプロジェクト」と銘打った企画。桃色ウサヒの「中の人」こと、佐藤恒平氏（現・町情報交流アドバイザー）が、町情報交流推進員として活動した2010年10月から13年9月まで、3年間における取り組みをまとめたものです。ウサヒ誕生の背景からプロジェクトのねらい、企画の工夫を説明しているほか、町の皆さんの提案から生まれた商品やメディアへの登場（掲載）回数を提示しながら、地域活性化効果、メディア等を通じた町外へのPR効果を立証しています。

「全国広報コンクール」は、広報紙、広報写真、ホームページ

ジ、映像、広報企画の5部門があり、広報企画の部については今回、全国の都道府県や市町村から59点がエントリー。12点が入選しています。受賞団体のうち町村部は当町を含めて2団体のみで、神奈川県や熊本県、神戸市や松山市、相模原市といった規模の大きな自治体と並ぶでの受賞です。

一方、「協働のまちづくり表彰」は、公（行政）と民（住民、NPO・自治会・商店街・企業・商工会など）が連携して構築・推進したプロジェクト等を表彰するもので、今回は、全国の自治体からグランプリ（1点、準グランプリ（1点、そして優秀賞（2点））が選ばれています。

いずれも町の皆さんと連携した情報発信と商品開発、そして地域おこし活動が評価されたもの。佐藤アドバイザーは「私にとっては町民の皆さんがアドバイザーです。気軽にかけていただける言葉一つ一つにワクワクしながら活動できて、本当に幸せです」と話していました。

目次 CONTENTS

- P2** 町長歳時記
- P3** Pick Up News 「桃色ウサヒプロジェクト」全国ダブル入賞
- P4** 特集 「5回目の挑戦でついに成功 雪室りんご」
- P8** 町政スポット
 - ・始動 朝日町総合ブランド戦略
 - ・大谷地区で大規模な林野火災
 - ・町文化財マップが完成 ほか
- P12** 広報誌で振り返る町制施行 60 年
- P14** 平成 26 年朝日町成人式
- P16** まちレポ
 - ・大沼浮嶋稲荷神社例大祭
 - ・モンテディオ山形朝日町応援デー
 - ・日本カヌーフリースタイル選手権
 - ・りんごの樹オーナー制開園式 ほか
- P18** 住人十色…奈良崎美雄さん（大滝）
- P19** それいけ！ウサヒと協力隊、町立図書館新刊案内
- P20** 健康あさひるばんざい、佐竹主事の七ヶ浜通信
- P21** あさひまちファンを全国につくっていこう
- P22** 町民の声
- P23** となりのりんごさん、戸籍のまど
- P24** 春爛漫 百花繚乱 ― 春の景色を彩る果樹の花

表紙の写真



里山の間から少しだけ顔をのぞかせ、水鏡に姿を映す朝日連峰。5月12日の午前8時頃、四ノ沢地内で撮影しました。朝日町内で朝日連峰を見ることができる場所は限られています。そしてこの「逆さ朝日岳」を見ることができるのは、今の時期の天気恵まれた日だけ。通勤途中でしたが、たまたま仕事用のカメラが車にあり、夢中でシャッターを切りました。

町長歳時記 (97)

大切な人生

意義のある人生をおくるために

ノートルダム清心学園の理事長であるシスター渡辺和子氏が若かりし頃、アメリカのボストンで修練者として生活していた時のお話を紹介します。

ある日の昼下がり、百数十名の夕食の配膳を割り当てられていたシスターは、心の中では「なんとつまらない仕事、早く済ませてしまおう」とだけ考えながら、手早く皿並べの仕事をしていました。その時、突然、背後に立っていた修練長から「何を考えながら、仕事をしていますか」と問いかけられ、皿並べの手を止めて、「別に何も」と答えると、問いかけた修練長から返ってきたのは、「あなたは時間を無駄にしています」という厳しい叱責の言葉でした。

修練長には、シスターの心の内が見えていたのかもしれませんが。

「同じ並べるなら、やがて食卓につく一人ひとりのために、祈りながらしたらどうですか」と、修練長は諭すように言われました。何も考えず、ロボットと同じく機械的に仕事をしていたのでは、時間ももったいないということをお教えたのだと。感謝の言葉を述べたのでした。

「つまらない、つまらない」と考えながら過ごした時間は、その人の人生の中に、つまらない時間として刻まれ、「お幸せに」と願いながら過ごした時間は、同じ時間でも、「愛」と「祈り」のこもった時間として残るのです。

時間の使い方は、そのまま、「いのちの使い方」であることを、その日、シスター渡辺和子氏は教えられたのだと言っています。

大切なのは人生に対してどう向き合い、どのような心構えで生きていくか。それをこの話は伝えていていると思います。

朝日町長 鈴木浩幸



町観光協会副会長で、雪室りんごの考案者 志藤修治さん（栗木沢）

「この年の空気まつりでは残雪を使ったゴムチューブの滑り台がありました。鮮度を保持しようというものです。」

雪室りんごの取り組みのきっかけについて話すのは、町観光協会副会長で果樹農家の志藤修治さん（栗木沢）。秋に収穫されたりんごは常温で3月まで保存できるものの、4月になると温かさと柔らかくなってしまう。つまり、4月以降は秋の収穫までりんごの「空白期間」となります。雪の中で保存することで、6月まで鮮度を保持しようというものです。

「空気神社の空気まつり（6月）でパリパリのりんごを提供し、お客さまに喜んでもらいたい…。そんな想いを抱いて企画したのが雪を活用したりんごの保存でした。今から5年前、2009年の話です」



2009年の空気まつり。残雪を活用したすべり台が雪室りんごのヒントとなった

した。その時ピンときたんです。この雪を利用できないかと。それに、神社に奉納される供物も店で買ったものでした。りんごの町なんだから、りんごくらいは用意できるんじゃないかと思って…」

雪中熟成でまろやかな甘さに

野菜や果物は低温にさらされることによって、寒さから身を守ろうと糖分を多く作る働きがあります。雪室りんごの特徴はここにあり、約4カ月間の熟成でまろやかな甘さになります。また適度な湿度が保たれる雪室は果物や野菜の保存に最適。雪室はこうした観点から先人たちによって考案され、今なお雪国の各地で活用されています。



雪室りんごに挑戦している生産者は若手を中心。とびきりの笑顔が5年越しの成功の喜びを物語っていました

特集 5回目の挑戦でついに成功

雪室りんご

「空気まつりの目玉にしたい…」「町のりんごのイメージアップにつなげたい…」——。町と観光協会、Asahi自然観、そしてりんご生産者の有志が協力して数年前から進めてきた「雪室りんご」への挑戦。4月23日に行われた今年の掘り出しで、コンテナに入ったみずみずしいふじりんごが雪の中から顔を出すと、「これまでで最高の出来」と生産者の表情には笑みがこぼれました。

雪室は空気神社近くに設置
澄んだ空気で付加価値

観光協会はその年の秋、空気神社を管理するAsahi自然観や町と協力し、雪室りんごへの挑戦を始めます。雪室は自然観の敷地内に設置しました。標高約600mにある自然観は春先以降もある程度の雪が残っていることが第一の理由ですが、近くに空気神社があることも大きな

理由。自然観の成原哲也支配人は「空気神社のきれいな空気は大きな付加価値となります。澄んだ空気、そして雪の下で熟成されたりんごで、一般的な商品と差別化でき、観光に利用できると考えました」
2010年以降は農産物の直売施設「産直和合」の会員農家なども加わり、量を少しずつ増やしてきました。



1. まろやかな甘みとパリパリの食感が特徴の雪室りんご 2. 掘り出されたりんごを手にする生産者。品質を確かめ納得の表情 3. 天候にも恵まれた掘り出し作業。半そで姿も 4. 多くのお客さままでにぎわう26日の産直和合 5. 外にも行列 6. 目当ての商品を手に入れ満足顔

▶雪室りんごへの取り組みの経過

年	参加者数	雪室の設置場所
2009	1	テニスコート脇
2010	4	コテージ駐車場
2011	4	コテージ駐車場
2012	7	コテージ駐車場
2013	7	空気神社入口前

▶2012年冬に埋めたりんご。翌年4月に掘り出してみると雪の重みでコンテナごとべしゃんに…



2年目から参加した井澤壽一さん（夏草）。産直和合の代表も務めている

成功までの長い道のり
しかし、その後待っていたのは失敗の連続。前年の経験を生かしながら数年間続けても、なかなか成功には至りませんでした。
参加者の一人で産直和合の代表を務める井澤壽一さん（夏草）はこう振り返ります。
「温度や湿度管理がうまくいかず、

カビが発生したり、実が柔らかくなったり…。豪雪で雪室自体がつぶれてしまったこともあります。温度や積雪量など、毎年違う気象条件の中試行錯誤の連続でしたが、『もうやめよう』という声は出なかった。これまでにない取り組みにみんな可能性を感じていたんです…」

5回目初めての成功

5回目となった今回は、空気神社入口前の建物近くに雪室を設置。屋根からの雪がたまりやすい場所である一方、落雪の衝撃を与えないよう軒下から2mほど離しました。昨年12

月下旬、生産者7人がコンテナ108箱（約800キロ分）を持ち寄り雪で覆いました。

それから約4カ月後、4月23日に行われた掘り出し。スコップによる手作業で約2mの雪の中から掘り出されたりんごはその場でカットされ、作業にあたった生産者や町、観光協会スタッフなどに提供されました。「パリパリとした食感、そして甘味も十分!」と納得の生産者の皆さん。4年前から参加する佐藤正樹さん（平）は「今年は掘り出す前から期待していましたが、食べてみて確信しました。やっとな成功ですね」と満面の笑顔でした。

メディアの紹介で大きな反響

掘り出しの様子はテレビや新聞等多くのメディアで紹介され、雪室りんごが店頭に並んだ26日朝の産直和合は、あふれんばかりのにぎわいで

した。通常より30分早く店を開きましたが、行列はその後もおさまらず、この日だけで予定の200キロを大幅に超える400キロ以上が飛ぶように売れていきました。

山形市から訪れた60歳代の夫婦は「天然の雪室は冷蔵庫保存よりも抜群にイメージが良くて食べてみたくなります。もともと朝日町のりんごは大好き。食べるのが楽しみです」と話していました。

観光資源として利用

「すべてはりんごの町のPRのため」と語る志藤さん。「雪室りんごも輸出事業と同じです。それ自体が目的ではなく、朝日町のりんごのイメージアップを図る手段の一つです。話題性があり、テレビや新聞で紹介していただきやすい情報でしょうから…」。

町は今後、雪室りんごを観光資源として利用する方向で準備を進めています。町総合産業課の佐竹長司課長は次のように話しています。

「町のりんごと空気神社と一緒にPRしていくと始まった雪室りんごの取り組みは、5年の歳月をかけて成功にたどり着きました。生産者と町観光協会、Asahi自然観、3者の熱意の賜物です。ここまで反響が大きいのはただの雪室ではなく、空気神社周辺の澄んだ空気の雪室で熟成されたことが大きいと思います。今後こうした付加価値を大切にしながらこだわりの商品として定着するよう、町としても支援していきたいと思っています」

今回掘り出された800キロのうち200キロはすぐに大型冷蔵庫に運ばれ、再度雪で覆われて保存されています。

りんごは来月の空気まつりで販売。雪の下で熟成されたまろやかな甘みとパリパリの食感をぜひご賞味ください。（※数に限りがあります。売切れの際はご了承ください）

【販売予定】

- ▶期日 6月7日（土）～8日（日）
- ▶場所 空気神社敷地内
- ▶問合せ先 町観光協会 ☎67-2134



—昨年の空気まつりでも子どもたちに大人気

空気まつりで雪室りんごを販売します



去年12月の作業の様子。屋根からの雪がたまりやすい場所に雪室を作った



1. 鈴木町長から町ブランド化推進プロデューサーの委嘱を受ける村尾氏 2. 当初の見込みを大場に上回る120人が詰めかけたキックオフイベント 3. 町のブランド化事業をPRするステッカー。村尾氏が全国各地で配布している 4. マラソンが趣味の村尾氏。出場するレースで町をPRしようと作ったタンクトップ 5. 町立図書館にできた村尾氏の著書コーナー。全12冊がそろっている

**住民票を町に異動する意気込み
朝日町民として事業を推進**
東京都出身の村尾氏は14歳で単身渡米。ネバダ州立大を卒業後は本田技研に入社し、主に中近東・北アフリカでの取引に携わってきました。スターブランド社を設立後は、一年間ほど休みなしで全国を飛び回り、講演や個別相談で中小企業や飲食店・旅館等の経営をサポートしています。

今回の仕事を前にして村尾氏は住民票を朝日町に移し、本事業にかけると意気込みと覚悟を示しています。その背景には「町長をはじめとした町全体の熱意なラブコール（村尾氏）がありました。2年前、あるビジネス誌で村尾氏を知った町長は、誌面の付録CDに収められている氏の講演に感銘。何度も繰り返し聞き、ついには暗記できるほどになりました。『朝日町には鈴木町長の絶大な理解と熱意はもちろん、町の皆さんのおもてなしの心、それに空気神社やウサビなどが生まれる自由で先進の気風があり、ブランド化を進める上で条件が整っている。まだ手がけたこ

とのない、自治体の総合的なブランド化にぜひ挑戦したいと感じた」と村尾氏。さらには、「取り組みは必ず成功させ、日本全体に社会的インパクトを与えたい。ブランド化の効果と意義を発信し、『中山間地にある小さな自治体の（朝日町でできたんだから、ウチもやれるはず』と言わしめたい」と意気込みを語ります。**スピード感を重視し
矢継ぎ早に新事業を展開**町は今後、ブランド化による売上げ、利益アップを目指す「あさひまちブランド大学」を今月30日に開校させ、村尾氏自身によるブランド化相談コーナーを役場内に開設。矢継ぎ早に新事

業を展開するとともに、活動の成果は専用のホームページ等で即時公開し、進捗状況を積極的に発信します。2年という限られた期間中、スピード感を重視した取り組みを行います。「このスピーディな世の中で大切なのは、『何を勉強してきたか』よりも、『今現在、何を勉強しているか』と村尾氏。この町で生活していくために、そして自己研鑽のために、ぜひ今回の学びと相談の場をご利用ください。詳しくは今回配布のチラシをご覧ください。」
本誌でも今月号から村尾氏による連載コーナーがスタートしています（21ページ）。ぜひご覧ください。



4月15日のキックオフ講演。ASAHI TOWNのTシャツを着て熱弁する村尾隆介朝日町ブランド化推進プロデューサー

総合戦略 朝日町 ブランド 始動

「大きな会社よりも小さな会社の時代」「かつていい田舎の時代」「Small is the new big」「小さいことは新しい」「小さいことは武器」「小さいことは成功しやすい」…。
「朝日町ブランド化推進キックオフ宣言＆講演会」が4月15日開発センターで行われ、このほど「町ブランド化推進プロデューサー」に就任した村尾隆介氏がブランド化の意義や目的、町が今後めざすべき姿などについて熱弁しました。

「町の引力」を強化する

町は今年度から2年間、町全体の総合的な「ブランド化」を進めます。地域イメージを統一し、そして高めることで、人・モノ・カネ・情報等が自然に集まる「町の引力」を強化するものです。今後は①「町全体」のブランド化、②町の観光・物産品やお店といった「個々の素材」のブランド化、③「町職員」のブランド化（ブランド戦略に対する意識の統一や職員としての接遇マナー、心構えの改善）という3本柱で事業を進めます。

町ブランド化推進プロデューサーに 村尾隆介氏が就任

今回、事業の推進役として招へいたしたのは、「小さな会社のブランド戦略」を手掛けるコンサルタント「スターブランド社（東京都）」共同経

今年度の区長さんをご紹介します

■政策推進課 地域振興係 ☎67-2112

■中部地区【25区】

本町	佐直雄二	81
西町	高橋久	108
栄町	花山忠夫	57
助ノ巻	海野武雄	53
大町	伊藤吉正	168
元町	安藤實	58
西原	渡邊勇一	19
前田沢	若月淳一	64
新宿	小関正典	60
四ノ沢	清野正則	56
小原	佐藤正敏	40
宿	菅井康正	31
沼向	菅井正治	56
平	菅井文市	15
大隅	鈴木博	31

古楨	渡邊秀壽	26
送橋	渡邊秀一	32
下芦沢	岡崎兼一	21
水本	平華一	23
杉山	鈴木昭一	28
松原	伊藤正男	28
宇津野	海野信雄	41
大滝	齋藤小治	21
雪谷	鈴木賢一	14
緑町	武田榮介	49

■西部地区【16区】

常盤	長岡信悦	94
夏草	阿部美喜雄	50
長沼	海野和義	16
西船渡	鈴木昭雄	42

ハツ沼	佐竹幸一	42
能中	志藤正清	37
高田	鈴木満	15
太郎一	佐竹敏幸	48
太郎二	小川澄夫	34
太郎三	大井勝	23
石須部	岸トキ子	11
立木	阿部雅一	31
白倉	阿部馨	8
松程	阿部敏昭	96
大船木	鈴木利和	20
今平	鈴木茂	13

■北部地区【14区】

大谷一	兼子正昭	31
大谷二	白田孝	37

大谷三	志藤彰	38
大谷四	鈴木清	26
大谷五	長岡藤夫	70
大谷六	白田幸輝	40
大谷七	村山則雄	13
中沢	五十嵐勉	38
真中	庄田文夫	36
舟渡	堀久雄	29
栗木沢	佐久間進	82
川通	志藤政喜	17
大暮山	堀幸雄	30
大沼	小林晴雄	31

※緑文字は新任区長
数字は世帯数です

【町区長会役員】

▶会長 阿部美喜雄 夏草区長（西部地区会長） ▶副会長 高橋久 西町区長（中部地区会長）、長岡藤夫 大谷五区長（北部地区会長）

改訂ガイドラインまとまる

～朝日中学校 部活動のこれから～

本誌の昨年12月号では、朝日中学校の部活動の現状を報告しました。近年は部員数の減少により大会に出場できない部が増加しています。生徒数は今後も減少が見込まれることから、現在の部すべてを維持していくのは厳しい状況となっていました。

中学校で昨年春から健全な部活動のあり方を検討していましたが、このほど結論がまとまり、既存の「部活動編制ガイドライン」の規定を右記の通り改訂しました。その内容をお知らせします。

本校の部活動は、地域の皆様からの温かい支援によって運営して参りました。急激な生徒減少による影響とはいえ、この度の改訂は苦渋の判断となりました。

極めて遺憾な事態ではありますが、朝日中のさらなる発展のために、皆様からのご理解をよろしくお願いいたします。

朝日中学校 校長 阿部 進悦

【現行規定】

部員の減少で、新人総体、次年度地区総体に出場できなくなった場合、休部とする。

【改訂規定】

1 所属部員の減少により、新人総体と次年度地区総体に団体として出場できなくなった場合、当該部における新入生の部員募集を行わないものとする。

2 所属部員の減少により、2年連続で新人総体に団体として出場できなくなった場合、当該部における新入生の部員募集を行わないものとする。

3 特別な事情があると校長が判断したときは、別途協議する。

本規定は、平成27年4月から運用するものとする。

※経過措置として、部活動以外の競技団体に所属し日常的に活動している生徒が、西村山中体連が主催する地区大会への参加を希望する場合、可能な限りこれを認める。

※新入生の募集が停止となった部の所属部員は、生徒の希望により活動を続けることができる。所属部員が全員卒業した時点で、当該部を廃止する。

空気が乾燥し、火災相次ぐ… 大谷地区では大規模な林野火災

■総務課 防災係 ☎67-2111



傾斜地での消火活動。数人でホースを支え延焼を食い止める

4月から5月上旬にかけて、町内では6件の林野火災が相次いで発生しました。いずれも原因はたき火によるもので、焼失面積の合計は6.5ヘクタール。5月中旬以降も降雨が少なく乾燥した日々が続いていることから、消防では引き続き注意を呼び掛けている。

このうち、4月27日に大谷地区内で発生した火災では、白山神社から西へ約600m付近の山林が広範囲にわたり焼失。近年にない大規模な火災となりました。

寒河江署によると、出火は午後1時20分頃で、車で通りがかった男性が119番に通報。この日は朝日中グラウンドを会場にした町消防団の春季消防演習が行われており、演習のさなかのサイレンに消防団員が緊急出動しました。

風にあおられて火が広がったことを受け、現場には通常の出動区域を超える範囲からも多数の応援が駆けつけましたが、急な傾斜地のため消火活動が難航。町は県に対し応援を要請し、新潟県防災ヘリ「はくちょう」が上空からの消火活動にあたりました（山形県の防災ヘリは他地域の火災に出動していたため）。鎮火は火災発生から約4時間後でした。

火災の大半は油断や不注意によるものです。今後も火の取り扱いには十分ご注意ください。

登録全 32 件写真付きで見やすく… 朝日町文化財マップが完成

■教育文化課 生涯学習係 ☎67-2118



▲登録32件がすべて写真付きで紹介されているパンフレット。折りたたむと手のひらサイズのコンパクトな大きさとなる▶

町教育委員会ではこのほど、朝日町の文化財マップを作成しました。

今年4月1日現在、町内で登録されている文化財は国指定が2件、県指定が5件、町指定が24件、計31件。また、文化財への登録はないものの、文化財に準ずる、地域の財産として親しまれ、大切にされている歴史的文化的財産が「朝日町ふるさと文化財」として1件登録されています。

マップの特徴は登録物件すべてが写真で紹介されていることで、「手に取る人に興味を持っていただけるものにしたかった」と教育文化課の佐藤主査。視覚的に興味をひくデザインとなっています。

文化財は長い歴史の中で育まれ、守り伝えられてきた貴重な財産です。今後このマップを大いに活用し、地域の宝を末永く守り伝えていきたいと思います。



広報誌で振り返る 60年の歩み

第1回
昭和29年～38年

昭和29年11月1日、朝日町は宮宿町、西五百川村、大谷村の1町2村が合併して誕生しました。

12月1日に執行された初の選挙の結果、初代町長には村山善一郎氏（大谷七）が就任。その後助役に岡崎吉郎氏（水本）、収入役に志藤武志氏（能本）が就任した。

中…のちの第3代町長、教育

人という大所帯でした。

合併期日時点の総人口は、現在の2倍以上の1万6984人で、その内訳は中部が7234人（42・6％）、西部が5871人（34・5％）、北部が3879人（22・8％）。世帯数は2806世帯で、現在よりも約500世帯多かったことがわかります。



町報あさひ 第1号

「町報あさひ」の第1号には、朝日町の「開庁式」の記事が大きく掲載され、「本町の清新なる建設譜を目指す」との文言が並んでいます。裏面には役場の組織体制もあり、当時は企画室、総務課、税務課、厚生課、経済課に西部、北部出張所の「1室4課2支所」体制だったことが記されています。

朝日町にとって昭和30年代は電源開発の時代と言えます。山形県企業局の朝日川第一、第二発電所、東北電力の上郷発電所が相次いで建設されました。この時代の広報誌をめぐってみると、「電源開発」そして「発電所」といった言葉が数多く確認できます。工事は県内外の大きな建設会社が手がけ、この時代はたくさんの作業員が町にやってきました。

発電所建設工事が結んだ縁

大町に住む安藤チヨエさん（73歳）の夫・光男さん（故人）もその一人。米沢から来町し、アルバイトとして働いていたチヨエさんとは出会いました。チヨエさんは当時をこう振り返ります。「あの頃は本当にたくさんの男性が働いていて、中高生の頃は学校が女子生徒に『決して話しかけないこと』と指導するほどでした。でも、私のように町外の作業員と町の女性が結ば

れるのは珍しくなく、『○○さんちの娘も連れて行かれたんだって』という会話もよく耳にしました。親が決める結婚が主流だった時代に、好きな男性と結婚できた私は幸せ者。夫との日々は大切な思い出です」



安藤 チヨエ さん



町報あさひ 第15号
（昭和31年6月発行）

昭和29年～38年までの主な出来事										年
38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	主な出来事
10月5日	10月1日	4月30日	1月7日	12月1日	6月4日	1月11日	7月	7月9日	6月2日	11月1日
町誕生10周年記念祭実施	町章を公募、制定（約800点の応募）	議員定数削減後初の町議選実施	「最上川洪水調節ダム反対期成同盟会」結成	村山町長が退任し、鈴木幸次郎新町長が就任	上郷ダム発電所完成（Ⅱ写真③）	昭和橋、永久橋に架替え（Ⅱ写真②）	朝日岳でインターハイ登山大会開催	誘致企業第1号皿谷岳詰工場が大谷に完成	太郎に簡易水道完成	朝日町誕生
										11月1日
										第1回議会 初代議長 鈴木幸次郎氏（大町）
										12月1日
										初の町長選挙 村山善一郎氏（大谷七）が就任
										4月2日
										町連合青年団結成（団長：菅井信夫氏）
										4月3日
										町連合婦人会発足（会長：布施なかえ氏）
										10月1日
										針生部落朝日町より分村、白鷹町に合併
										10月5日
										第1回町民運動会開催（Ⅱ写真①）
										5月11日
										朝日川電源開発に着手（起工式）
										6月30日
										宮宿小体育館完成
										8月
										岩坂橋が永久橋に
										2月24日
										朝日音頭つくられる
										8月
										都市計画（宮宿中心街）事業に着手
										6月1日
										町立朝日病院完成（開院）
										8月18日
										第1回町民登山行われる
										10月
										大谷地区に水道完成（工費740万円）
										11月
										朝日川第1発電所完成
										12月
										木川部落に電灯が入り、無灯火部落解消
										2月
										朝日川第2発電所が完成
										3月17日
										最上川電源開発推進委員会が結成
										6月2日
										太郎に簡易水道完成
										7月9日
										誘致企業第1号皿谷岳詰工場が大谷に完成
										7月
										朝日岳でインターハイ登山大会開催
										1月11日
										昭和橋、永久橋に架替え（Ⅱ写真②）
										6月4日
										上郷ダム発電所完成（Ⅱ写真③）
										12月1日
										村山町長が退任し、鈴木幸次郎新町長が就任
										1月7日
										「最上川洪水調節ダム反対期成同盟会」結成
										4月30日
										議員定数削減後初の町議選実施
										10月1日
										町章を公募、制定（約800点の応募）
										10月5日
										町誕生10周年記念祭実施



③完成間もない上郷ダム発電所



②昭和橋の渡り初め



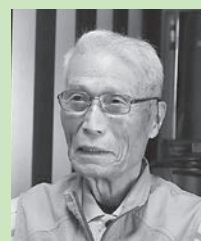
①町民運動会

にぎやかだった町民運動会

合併後の町では、新町住民の融和を目的に、旧町村対抗の「町民運動会」が行われました。町報あさひ第8号（昭和30年11月発行）には、10月5日、豊龍グラウンドを会場に開かれた第1回大会の記事が掲載されています。「1万人の大観衆の中に赤、青、黄、色とりどり。珍プレーの続出し、終始笑いと楽しい雰囲気の中に競技は進めら

れた」とあります。競技時間はなんと6時間で、文末には「朝日町の明るい明日の発展を約束するものであろう」という結びとともに、「終了時間をもっと早く切り上げよ」との反省の言葉も確認できます。町職員だった榎壽太さん（大谷一／90歳）は当時を次のように語ります。「同じ町民として仲良くするには、『汗を流して絆を深めることが一番』と開

かれました。スポーツが得意だった私は審判役を任されました。競技は徒競走のほか、重量挙げもありました。今では考えられないような怪力の持ち主が集まり、力自慢を競っていましたね」



榎 壽太 さん



町報あさひ 第8号
（昭和30年11月発行）